

あかしん

わが町、わが店、この道一筋。出逢いとコミュニケーション あかい新聞店ホームページ <http://www.akai-shinbunten.net> <発行所>あかい新聞店 武豊店/知多郡武豊町字金下37番地 ☎<0569>72-0356 常滑店/常滑市市場町4丁目167番地 ☎<0569>35-2861

企画・制作：株式会社 新聞ビル

クロスメディアを総合力でプロデュースする

PTC GROUP

半田中央印刷株式会社

〒475-0032 愛知県半田市潮干町1番地の21
TEL 0569-29-2525 (代) FAX 0569-29-4500
<http://www.handa-cp.co.jp>

元氣のでてくる“ことばたち”

(213)

村上信夫

撮影・鶴崎燃

■村上信夫プロフィール

2001年から11年に渡り、『ラジオビタミン』や『鎌田實いのちの対話』など、NHKラジオの「声」として活躍。

現在は、全国を回り「嬉しい言葉の種まき」(毎週日曜10:00～)、月刊『清流』連載対談～ときめきトークなどで、新たな境地を開いている。各地で『ことば磨き塾』主宰。

1953年、京都生まれ。元NHKエグゼクティブアナウンサー。これまで、『おはよう日本』『ニュース7』『育児カレンダー』などを担当。著書に『嬉しいことばの種まき』『ことばのビタミン』(近代文藝社)『ラジオが好き!』(海竜社)など。趣味、将棋(二段)。
<http://murakaminobuo.com>



中学でイジメにあい不登校になり、ネット検索で調べた沖繩の離島・鳩間島の中学へ、自らの意志で転校した。島根の全寮制の高校も自分で選んで決めた。明治学院大学入学後も、休学してカナダやアイ

正解は一つじゃない。大事なのは、考えることだ。○や×、あるいは△に意見が分かれたとしても、それぞれが考えるきっかけになればいい。原発や特定秘密保護法のことなど、それぞれ賛否両論あるが、世論調査の結果を見ると、現内閣の支持率は過半数に達していない。みんながみんなのままでいいとは思っていない。でも真剣に

えている必要はないけど、むしろ一〇〇%考えないというほうが不自然だと思います。『僕らはまじめ一本やりじゃなかったから、ここまで活動も続けられたのだと思います。人生のすべてを賭けているわけじゃないし、授業の単位や就活も大事。デモの途中で『じゃあ僕、これからバイトなんて帰ります』と言えば『おお、がんばって』とみんなで送り出しますから(笑)』

デモンストレーション

現代社会に息苦しさをを感じる人が多いから、党派にこだわらないデモが広がったのかもしれない。デモのスタイルも、ラップを入れたり音楽を流したり、昔とは違う。アジテータ口調の「われわれは〜」は禁句にした。「僕と君は違う人間で考え方はみんな違うから、話すときは『僕、私、俺』の一人称にしよう」と決めたんです。演説っぽくすると上から目線に感じるから、普通に話そうと。『デモ十学生十政治』や『ヤバイ奴ら』みたいな見方をされたので、まずはそのイメージを変えたいと思ったのだ。みんなが参加しやすくするために、どんなものだったら受け入れられるかを考えた。まさにデモンストレーション。「伝える努力をしないと、受け取ってもらえません。僕自身はみんなの意見をまとめる調整役でした。法案に対する言葉一つとっても『廃案』か『修正』かで、意見が分かれます。違う意見をみんながどこまで許容できて、どんな方向にもっていくかという調整が必要でした。』

去年9月、参議院特別委員会の公聴会での話は評判を呼んだ。「与党の議員の中でも葛藤している人はいたと思うので、政治家である前にたった

会いたかった。奥田愛基(あき)さんに会いたくて、母校まで行った。安保関連法案に抗議の声をあげ、国会前で大規模な学生デモを牽引したSEALDsの活動が目され、その中心的な役割を果たした奥田さんが明治学院大学の後輩だと知ったときは嬉しくなった。

愛が基本

ひとことと言うと、好感の持てる青年だった。温厚で冷静な語り口。教条的なところなど、微塵もなかった。覚悟の上で動く「個」が社会を変えると信じている。ただし、自分と違う考えを排除したり、やみくもに異を唱えたりはしない。愛がなくてはならないと考えている。「愛が基本」、い名前をつけてもらったものだ。

1992年、福岡生まれ。奥田愛基という人間を創り上げた背景には、父の影響が大きい。父は三〇年近く、ホームレスの世話をしてきた。「朝起きると、知らない人が家にいて、新しい家族だよと紹介されました」と奥田さんは、苦笑する。

牧師で、NPO法人の代表も務め、人のために生きているようなところがあった。「まるで男マザーテレサといつしよに暮らしているようなものですから、うっとうしいと思うこともありましたよ(笑)」。

たった一人の個であってほしい

奥田愛基さん

ルランドを旅して、同世代と、政治や平和を語り合った。

人生の節目節目で考え続けてきた。「自分から積極的に考えたというより、時代的にこうならざるを得なかったという感じがすね」。

シールズの活動をするようになって、自分自身でも変わったと思うことがある。以前の自分は社会運動を一生懸命やっている人を、「賛成と反対の人がいるのに、一つの意見を主張し続けるのはどうだろう」と冷めた目で見ていた。「でも、そうやって評論家気どりでいても、現実には何の影響も与えないと気づいたんです。イエスという意見があるのと知った上で、自分はノーという意見を言おうと思ったんです」。

それには勇気が必要だった。こんなことを言ったら、人にどう思われるだろうかと気にする自分がいた。でも、何かを言ったら批判を受けるのは当然だと考えたら気持ちに楽になり、ナイーブだった自分が少しタフになったような気がした。



俳画／イネ・セイミ

去年9月、参議院特別委員会の公聴会での話は評判を呼んだ。「与党の議員の中でも葛藤している人はいたと思うので、政治家である前にたった

一人の個であってほしいと訴えました。というのも、戦後七〇年、自民党は安保法制で個別的自衛権は認めてほしいが、集団的自衛権は認められないと言いつつ続けてきたんです。当選回数が多い古参の自民党議員はそこをよくわかっているはずですから、個に立ち返って、もう一度考えてほしいと思いましたが、結果的に党の方針で賛成せざるを得なかった人もいたと思うが、一人の個人として考えてほしいと訴えた。

今年3月、大学を卒業したが、当面は、去年12月に結成した政策提言のシンクタンク「RED E.M.O.S(リデモス)」の活動が中心になりそうだ。代表理事として、立憲主義を擁護するリベラルな政治、自由な個人が相互に認め合うリスクベクトル政治、自由で民主的な社会を支える政策アイデアを刷新するリニューアル政治を掲げて活動していく。

参議院選挙でも、名前を連呼したり、政党側の主張を言うだけではなく、有権者に伝わりやすいやり方や、双方向のコミュニケーションが大事だということを提案してみたいと思っている。しばらく、奥田愛基から目が離せない。



好評発売中

イネ・セイミプロフィール

フルート奏者として活躍中。俳画家。絵画を幼少より日展画家の(故)川村行雄氏に師事。俳画を華道彩生会家元(故)村松一平氏に師事。俳画の描法をもとに、少女、猫等を独自のやさしいタッチで描いている。個展多数。



俳画教室開講中

とき 常滑屋
とき 俳画教室月二回 午後一時三十分〜三時三十分
会費 一回、一、二五〇円(三ヶ月分前納制)
問合せ ☎〇五六九(三三五)〇四七〇

インディアンフルーティスト教室開講しています

誰でも簡単に音が出せる楽器です。あなたも今日からインディアンフルーティストになるチャンス!!

会場 マツイン楽器店
ミュージックガーデン武豊
開講日(月2回)
10:00〜11:00
形態 グループ
会費 1ヶ月8,802円(入会金5,400円)
詳しくはマツイン楽器店本社 教室係まで
フリーダイヤル:0120-37-5576

講師 イネ・セイミ
(日本インディアンフルーティスト協会ディレクター)
ネイティブアメリカンのスピリットが感じられる
インディアンフルーティスト。その音色はやさしく心に響きます。
1レッスン:30分4,000円 会場:半田市潮干町1
申込み 0569-89-7127
お問合せ ine.seimi.jp@gmail.com

知多の新鮮たまご
発酵ケイブン

(有)知多エッグ

知多郡武豊二ツ峯380
TEL0569-73-6341

新シリーズ ヒューマンライフ

『新・現代家庭考』 就職

— 自分ドラマつくろう — (63) 岡田 清治

姪の就職2

舞はたくましく育っていた。健太郎は逝ったが、安心して見守れる通りになったではないか、と真三は舞の横顔を遠目に見ながら思った。やがて真三は壁に掛けられている時計を見やりながら早足で舞に近づいて行った。

「そろそろ出かけようか」

「はい」

二人は受付でお礼を言つて病院を後にした。

海に近いので、心地よい風を二人は感じていた。クルマに戻った真三はすぐエンジンをかけた。ゆっくりクルマを出口に向けて走らした。

「これから渥美半島に渡つて帰ろうと思つていたが、いまフェリーは航行していかないようなので高速道路を通つて帰ろうと思うが、いいかい」

「はい」

真三は美浜ICに向けてクルマを走らせた。

裕美には夕方、名古屋駅の近くの建て替えられた大名古屋ビルヂングに着くと事前に連絡しておいた。裕美は早目に家を出て指定された新装ビルのカフェDで店内に置かれた雑誌を見ながら待つことにした。到着時間がわかったら携帯で知らせることになっていた。裕美は久しぶりに名古屋駅に出かけたが、高島屋がある側は一段と明るくなつていてと感じた。大名古屋ビルヂングにはファッションの店も多く、シャレた雰囲気近代ビルに生まれ変わつていた。

真三と舞の二人はしばらく車内では沈黙を保つていた。真三は裕美に連絡することを到着一〇分前にしようとしてと運転に集中していた。舞はインドへ行くことをはつきり母親に伝えようと改めて思い巡らしている風であつた。

「舞さん、お母さんあと一〇分で名古屋駅に着くと携帯にかけてくれる」

「わかりました」

舞はバッグに入れている携帯を取り出し、母親にかけた。

「お母さん、あと一〇分で着きます。五時半ごろになります。夕食？ちよつと待つて」

「叔父さま、夕食はどうされますかと母が聞いています」

「夕食は自宅へ戻つて食べると伝えてください」

舞は再び携帯で裕美に伝えた。

「わかりましたということですよ」

「ありがとうございます。今日はお母さんと二人でゆっくり話をされた方がいいですよ。連休、舞さんが出発する日にお母さんと空港へ見送りに行くつもりです。その時、ゆっくりと話をしたいと思つています」

「ありがとうございます」

クルマは大名古屋ビルヂングの地下の駐車場に吸い込まれるように入った。二人はエレベーターで5Fのカフェに向かった。

カフェに入ると雑誌から目上げた裕美がにこやかな表情で二人に向かつて軽く会釈をした。

「本日はご苦労さまでした。食事の方はいいのですか」

「はい、お二人でゆっくり話し合いがなさつてくだ

さい」

テーブルに氷水の入ったグラスが二つ追加された。女子店員が注文を待った。

「なにか飲もうか」

舞と真三はコーヒーとオレンジジュースをそれぞれ注文した。

「長く待たせましたか」



写真：名古屋駅前の風景(著者撮影)

※この物語に対する読者の方々のコメント、体験談を左記のFAXかメールでお寄せください。
今回は「就職」「日本のゆくえ」「結婚」「夫婦」「インド」「愛知県」についてです。物語が進行する中で織り込むことを試み、一緒に考えます。
FAX：0569-34-7971
メール：takamitsu@akai-shinbun.net

■プロフィール

著者：岡田清治おかだせいじ



一九四二年生まれ ジャーナリスト
(編集プロダクションNEXT108代表
著書に『高野山開創二百年 いっぱいさん行状記』『心の遺言』あな
たは社員の全能力を引き出せます
か！『リヨンで見た虹』など多数

「いえ、ファッションの店をのぞいて、さきほど着きました」

「このビルもすっかり変わったでしょう」

「そうですね。全体に若者向けの印象ですね」

「このビルは一九六二年一〇月に着工、六五年に完成、躍動を続ける名古屋市内にふさわしいビル名をつけよう」と大名古屋ビルヂングと命名したのでした。屋上のビアガーデンも多くの人で賑やかでした。旧館を二二年に閉館、翌年に新築着工しました」

「一五年秋に完成したのでですね」

「そうです」

「名古屋が元気づいて見えますね」

「そうですね。舞さんを一日中、引っ張り回しましたので疲れていると思います」

「まだまだ元気です」

と舞はうつむき加減にはほ笑んだ。

真三は今日、巡つた知多半島のポイントの説明しながら報告した。ただ、舞がインドへ行くことについては、舞に任せようと、あえて加えなかった。裕美もとくに質問をしなかった。

コーヒーを飲み終えた真三は請求書を持って、二人に挨拶して出口に向かった。二人は真三が抜けたテーブルにいてしばらく沈黙の時間が流れた。

「舞も疲れたでしょう。どこかで食事をして帰ろう」

「…」

「高島屋の中の洋食のレストランで食べようか」

「ええ」

二人は真三の出たあと、しばらくしてカフェを後にした。

「名古屋に出てくるの、舞も久しぶりでしょ」

「そうね、半年ぶりだと思う」

「さすがにターミナルね。人が多いよ」

「そうね。でも大学のある京都が毎日お祭りをやっているかと思うほど、人、それも世界からやってくる人でごった返している」

「京都ね。お母さんもしばらく行っていないな」

「今度、インドから帰ったら、遊びにきたら…」

「そうね。秋の京都もいいだろうね」

二人は徒歩五分程度の距離にそびえ立つ高島屋のエレベーター前で待った。

「このレストラン、一度来たかったの」

「いいわね」

幸い、時間が早かったこともあって席が空いていたので、二人はすぐにテーブルに案内された。水の入ったグラスを運んできた女性は二人の前にメニューを広げて置いて、「お決まりになりましたら、声をかけてください」と言い残して離れた。

「何、食べる？」

「ハンバーグにするわ」

「お母さんはチキンにする。それとサラダをとうろうか」

「いいね」

「舞も成人式を迎えたからアルコールはいいのでしょ」

「もう大学のコンパで飲まされているよ」

「それなら飲めるのね。ワインにしようか」

「いいわ」

裕美は店員に手を上げて注文した。しばらく沈黙の時間が流れたが、裕美が

「知多半島での叔父さんとの話、どうだった」と、静かに口火を切った。

「叔父さんはいろいろなところを知っているのに驚いた」

「そら、ご商売していたからお客さんも多いことだし、知り合いも結構、いるという話ですよ」

「商売を止められてもいろいろなことに興味をお持ちなんですよ」

「そう。舞は姪だからいろいろの思いがあつて、話されたの違う」

「やはり弟だからお父さんのことが忘れないのだと思う」

「とくに仲が良かったから、話したいこともいっぱいあつたでしょう」

「いろいろ教えられることが多かった」

「ワインが運ばれてきた。二人はグラスを持って乾杯しながらグラスを合わせた。

「このレッド、おいしいね」

「お母さん、ワイン、わかるの？」

舞は微笑みを見せた。

「お父さんに時々、連れて行つてもらつたし、最近、家でもたまに寝る前に一口飲んで床に入るので、多少はわかるの」

「そうなの」

二人はしばらく食事に集中したのか、黙して口に運んだ。裕美はどう切り出そうかと逡巡したが、ワインを一口飲んで口を開いた。

「叔父さん、インドに行くことについて、どう言われたの」

「いろいろ情報を集めてくださるそうです」

「賛成したの」

「賛成というか、これからは協力してくれるのだから、インドへ行くことに反対ではないと思うし、ダメとも言われなかった」

「女の子一人でインドへ行く危険について話されなかったの」

「行き先は先輩のすすめでインドのシリコンバレーといわれるカルナータカ州の州都、バンガロールに行く予定だと話した。休みを利用して現地の事情を知るために中部国際空港から成田空港を経てインド航空でバンガロール空港に向かうことを話した。空港へは先輩がクルマで迎えてくれることになっていることも」

「それだけ」

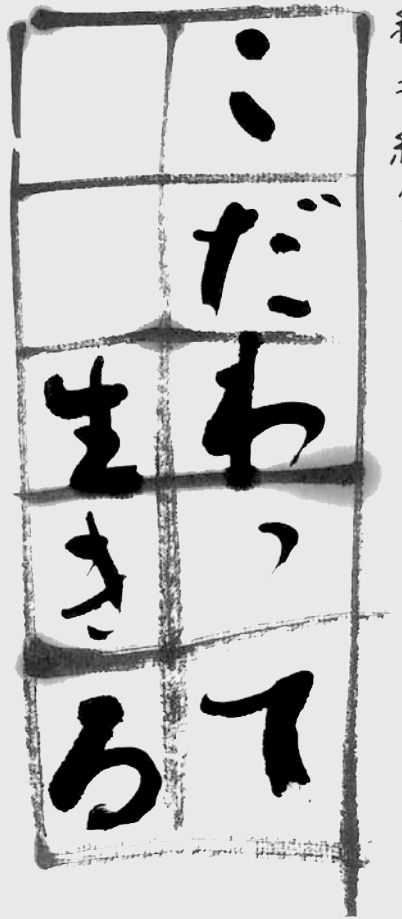
「まだ情報が十分、集まつていないので、その後のことはこれからなの」

舞は、「大学はとりあえず休学して現地でインターナショナルスクールに入学して語学の特訓を受ける」ということは裕美に話さなかった。

「目的は何かということは言わなかったの」

「叔父さんの友人も現地大学に知り合いがいるのでいろいろ聞いてくれるそうなの」

絵手紙集



絵文
榎山善久

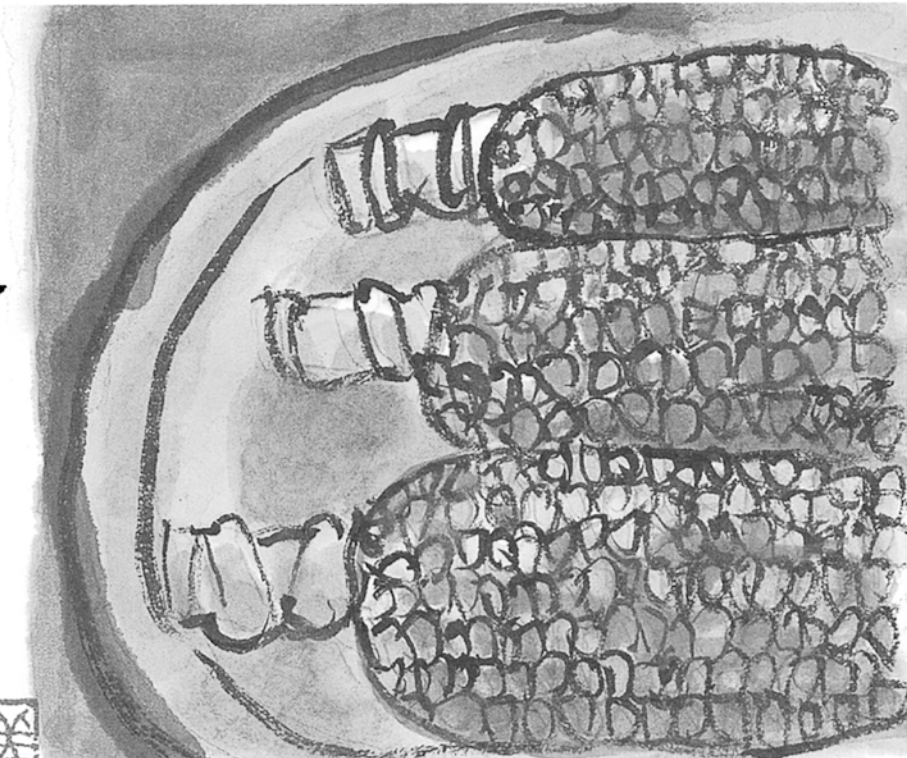
返文
小林玲子

榎山善久

昭和十一年碧南市で生まれる。
丸栄陶業株式会社代表取締役。
碧南商工会議所会頭。
愛知県陶器瓦工業組合理事長。
全国陶器瓦工業組合連合会理事長などを歴任。
平成十三年藍綬褒章受賞。
平成二十二年旭日小授章受賞。
丸栄陶業株式会社取締役会長 現在に至る。
京都造形芸術大学・通信教育部芸術学部美術科・
洋画コース大学院修士課程二回生。

小林玲子

碧南市に育つ。
西尾市在住
共著「西尾の民話」
童話「サケの子ピッチ」
随筆「海辺のそよ風」
(中経コラム「閑人帳」より)
ミュージカル脚本
「めぐりちゃんのおうち」ほか



静岡県森町のとうもろこし「甘々娘」

歯に詰まり

難儀してでも

トゥモロシ

夏はやっはりトゥモロコシの
季節です。現在我家は小家族な
ので、時々三本位買ってきます。
六月に汝松のあまふからトゥ
モロコシを沢山頂戴しました。
早速、外孫達にお裾分けした。
宅急便の中にも、静岡県岡智郡
森町、森のとうもろこし「甘々娘」押
しの食べ方と保存方法のリーフレット
があり、その通りサ茹でて食べ
たら最高でした。美空ひばりの
「あの娘可愛やカンカン娘」赤い
ブラウスサンダルはいて……..
名前も最高です。

まるまる太った「甘々娘」
本当にうまそう！デス。
○○娘○○小町「ヘキナン美人」などと
作物のうまそうなものは、
どうやら女性名詞のようデスネ。
名付け親が男性だからでしょう。
それにしてもうまいネーミングですねえ。
元祖「カンカン娘」の高峰秀子さんの
映画は幼い頃観ました。
あの歌の歌い易さは彼女のキーに合わせて
低く作曲されたせいとか・女王ひばりは
何を歌っても本當にうまい！デス。
食べても歌ってもカンカン娘は
最高のようです。
御句にも笑いました これもまたうまい！
暑さに負けずお元気で 乱筆多謝

